

## 「心とくらしの不健康」を農村医学のテーマに

富山県農村医学研究会 会長 越山 健二

平成7年は、世界的な不況と戦乱、環境破壊の中で迎えた。1月17日朝の阪神大震災は、日本や世界に大きな衝撃を与えた。今さらの如く自然と人間について、地球と人類について大きな反省を求めた年のように思う。

私は医師として50余年、地域医療を求め農村医学会や地域医療学会に参画し体験を重ねてきた。この期間は、まさに激動、激変の時代で、経済的には貧困の社会から裕福の社会へと科学、技術の進歩に支えられ豊かな物質文明の暮らしを築き上げてきた。

今ここで、WHOが定義する健康の三要素、即ち身体（肉体）、精神（心、意識）、環境（自然環境、社会環境）の三つの視点から健康を点検してみたいのである。

詳細な記述は省くがこの三者が時代の推移と共に貧弱となり不健康になってきたように思う。恵まれた物質文明の中で気付かず忘れられていたものは、いのちの尊厳や畏敬である。私どもの日常生活の中で、衣、食、住を構成する多くのものはすべて生命、または生命体そのものである。それは、限られた地球上の有限の資源なのである。飽衣、飽食のくらしの中で多くの生命を廃棄し、更に生態系を破壊し、環境汚染をすすめる人類について強い反省が求められている時代だと思う。

人類は進歩、発展、豊かさを求め、その基本は、科学、技術の発展であり、特に二十世紀はマクロ、ミクロの華々しい成果がある。1953年、動物、植物を含め、全てのいのちのあるものは同じ生命素子（DNA）によって

構成され、それ等が巧みな生存秩序によって生態系を作り共存している事を知った。いのちは、他のいのちの犠牲によって支えられているが、むさぼる事は許されてはならない。「もったいない!!」「贅沢は敵だ!!」の清貧の思想は影が薄くなり、「消費は美德だ」の風潮に高まりがある。一粒の米、一枚の紙、一滴のガソリン、すべては、地球上の尊いいのちであり、いのちから構成されている。それ等はすべての生き物の共通の財産である。

このような事は、当然理解されている事であると思うが、人類や人間の生命、保健に大きな関わりがあり、今日の少子高齢化社会の対応に重要だと考えるからである。三十数億年の生物の歴史の中で僅か2、3百万年前に出現した人類にだけ、この横暴が許されるものではないはずで、強い反省が求められているのである。この現実を認識し、意識改革をはかる事は生命の尊厳や延いては健康を維持増進し、特に少子高齢化社会の対応に重要な関わりがあると考えている。

具体的な取り組みとして平成6年は、精神の不健康を新しい第二の農夫症としてとらえ、取り組むことを提唱した。それは、近代文明がもたらした心の貧困であり、人間性の喪失であるが、その回復を自然と共生する農業に求め農村医学会に調査研究をすすめる行動を期待したのである。また、老人ケアについて、老いの実像を明らかにするため全国的な調査研究を実施中である。更に、日中友誼長存の主旨にのっとり、河南省と農薬中毒及び農

業災害についての共同調査をすすめてきた。本年は更に高齢者の老化とその対応について調査を行い、交流を深めたいと思う。

時代は、地球と人類、いのちと健康、生態系や生存秩序、生命倫理の視点からの意識改革が求められていると考えている。

本年4月、名古屋市で行われる第24回日本

医学会総会のテーマは「人間性の医学と医療」であり、「生命の世紀をひらく」である。科学、技術は数量化の中で豊さを求めてきたが、数量化されない精神や人間性にも焦点をあて地球のあらゆる生命の視点から生老病死の4つの苦悩の対応に期待していきたい。